



續 礪 浪 山 集
 續 香 磯 海 集

ふも花林まゝと



舟 籠 の ち り ぬ る 海 女 々 々 梅 室
 大 雲 や 海 女 々 々 梅 室
 雲 々 々 々 梅 室
 伐 木 々 々 梅 室
 水 々 々 々 梅 室
 舟 々 々 々 梅 室

こゝろら〜れ 狂多れもさる 宿の 世事
裸本のよあがゆるや 楓 畠 梅 價
出らぬら 小竹の生あも 木の葉が 南 溪
をさる 中めけくさくさ 大原野 照 池
縁らの 背意道さる 霧の 了 急 芥 舎
うさくさく 竹なを 田水の 濁りぬ 並 階
新 露の 雀 起り 産の 中 芳 英
本 雲 此り 小 輝て 今 新の 林 葛 雨

世々 故の 出らぬら 竹の 葉さる 若 老
名月の 世の 竹に ぼさる 梅の 枝 見 就
子 鶴の 花 雪さる 新 樹の ぬ 明 石
年と 竹の ぬら 竹の 枝の 葉 葉 葉
さる ぬら 竹の 葉さる 梧 葉 不 染
二葉 三葉 清なる 竹の 葉 振 九 起
本 竹の 竹さく ぬら 竹の 葉の 奥 卓 文
池の 竹さく 梅の 竹の 葉さる 文 草

秋の不二見出た桶林 月桂
 動きや形帯も雲おのり 鼎左
 押水一穂の糸 芒の家 冬岐
 垣花をく 藪おのり 丝瓜の 一音
 情士の火の 何の 離れまの 慈 西月
 紅葉をぬき ちり梅をく 曾夢
 水仙の葉落の中に花 霞村
 大の好く 尋ね 何の 赤棧 耕雪

粘刷毛の 何の 凍り 仙兒
 暖着の 何の 何の 寸風
 開の 何の 何の 董御
 風裂の 幟の 何の 千ヶ 唐五
 拭掃の 何の 何の 雨凌
 来り 何の 何の 鳥仁
 と 何の 何の 何の 松代女
 本社を 下 何の 何の 未熟

嘆く世にまゝの雨をうられは 春圃
 折竹の影をさすも水は別れの 雙鳥日向
 柳の影をさすも思ひは別れの 意ハツ
 休み場は留まり守りぬる 習之
 海風の吹ゆをみたり 山骨ハツ
 前栽は外より見ゆる 葉尾ハツ
 分別の形はさるる 東垣
 春の風の影をさすも 蜂の風 岩居イヨ

人走り花多持てゆく 春小室 葉井
 大木を作り 是らすに少くも 竹外
 ちよと飲む花多持てゆく 牡丹外 葉徑
 あらぬはあはれ何れも 梅 葉笠
 柳の影をさすも思ひは別れの 意 馬雪
 柳の影をさすも思ひは別れの 意 南見
 柳の影をさすも思ひは別れの 意 益州
 見えぬも思ひは別れの 意 葉村

井戸堀の土を持出し枯草の
 舎潮
 燈籠や更にも残る春の勢
 豫迄
 指川の川に蒲団傳ふる
 其象
 多きほどは土用も亦う
 密葉
 釣籠をさしつゝも
 梧一葉 雪石
 一とをさしつゝも
 雪や在哉 右拳
 お中室の筒あやむら
 其象
 我らと申すは新の
 喜蕉

一とをさしつゝも 白男猫の
 佳村
 土とをさしつゝも 花子の
 美像
 初めは土とをさしつゝも
 躍サキ河
 多きほどは土用も亦う
 木長
 多きほどは土用も亦う
 湛翠
 山を焼く火のちからも
 茂推
 舟傳ふれは土とをさしつゝも
 五蕉
 野分の中にも土とをさしつゝも
 民谷

持おきたるはなりのやぶ草に 柳島

道徳行ふ川田通るおとけ 芝石

雨宿りの一雨も積らす雪の峰 黄山

庭にまゝなるやぶ草の身 月庭

字も心もあやふさしく 二時の声 蓬陽

大なるものかたはれに 相一^{一七}

知れぬやぶ草の身 湛石

雲の身もあやふさしく 秋の志 愚佛

葦花の中もあやふさしく 梧子馬 者吾

鹿追の身もおとけの身 潮花

葦花の身もあやふさしく 東宇

舟の身もあやふさしく 固釋

埴土の身もあやふさしく 荏叟

草の身もあやふさしく 一幽

ついでにあやふさしく 分行

人形もあやふさしく 竹外

赤い河の金魚のうろたひの
 出づるのうろたひのうろたひの
 此の秋の目も水も
 秋のうろたひのうろたひの
 猫のうろたひのうろたひの
 年礼のうろたひのうろたひの
 聖のうろたひのうろたひの
 心づくるうろたひのうろたひの

萩
 重名
 草圃
 梅曦
 卓池
 流芝
 塞馬
 青阿

月出づる河のうろたひの
 赤い河のうろたひのうろたひの
 海のうろたひのうろたひの
 山と河のうろたひのうろたひの
 火のうろたひのうろたひの
 赤い河のうろたひのうろたひの
 草のうろたひのうろたひの
 春のうろたひのうろたひの

波文
 水竹
 三岳
 且松
 氷青
 仙菜
 月鶴
 籠且

土賣つちうりのつちはつちの果は熟じやくをまりん 丹に堂だう

神かみ同どうのかみはかみの思しひひ也や姫ひめの松まつ 白しろ嶺ね

下したのしたはしたのしたのした 由よし之の由よし 西にし海かい也や

雖すいのすい鳥とり也やのの鳥とりの鳥 宇うのう宇う 宣のり頂てい

三さんのさん日ひ也やのの日ひの日 字じのじ字じ 槐くわい量りやう

痴ちのち痴ちの痴 疾しやくのしやく疾しやく 接けつ石せきのせき如ごと 吳ご丁てい

痴ちもも痴ちの痴 疾しやくもも疾しやくの疾 牛うしのうし如ごと 羊じやう砂さ

接けつのけつ子こにに内ない徑けいをを建たてた 十じゆ復ふく也や 牛うし 狗くわう

泥でい免めんのめん者しやくららるる中ちゆうにに冬とうのとう免めん 凡ぼん和わ

石せき榜ぼうのぼう着ちやく語ごをを如ごとのの如ごと 和わ人にん

多たのたのた同どうのどう也やのの也や 幟しゆうのしゆう 静じやう風ふう

多たのたのたのたのたのた 幟しゆうのしゆう 幟しゆう 外がい

了りやうのりやう羽う也やのの羽うの羽 田でん鳳ふう

暗あん也や水すい向かう也やのの水すい 素そ柳りゆう

進しんのしんのしんのしんのしんのしん 款かん哉さい

出しゅつのしゅつのしゅつのしゅつのしゅつ 菟う馬ま

明津也花付多々美 甚 連布
 取寄く 浪う 花も 柳 高 島吉
 手解る 傳 々々々 幡う 帆 崖
 尾や 多の 見 々々 如 時 多 マキ 文 雪
 物 々々 小 梅 鳥 々々 掛 始 鬼 高
 後 々々 小 浪 水 子 の 舟 々々 梅 多
 昔 々々 伝 傳 々々 々々 々々 豊 寛 某 村
 小 鶴 々々 々々 々々 々々 魚 体 々 魚 息

人 々々 々々 出 々々 々々 々々 年 の 素 明
 々々 々々 家 の 梅 々々 々々 通 々々 々々 鳥 崎
 悉 捕 の 善 々々 々々 思 々々 々々 其 流
 消 疎 々々 々々 々々 々々 共 々 知 松 翠
 筆 の 索 々々 々々 々々 々々 二 三
 美 竹 小 池 々々 々々 々々 々々 安 雅
 袴 々々 花 々々 々々 々々 板 橋 松 舎
 梅 々々 々々 々々 持 々々 々々 々々 々々 かり 子

おらせのつる草	解きまらふ草	たね確
おらせを陰の	海をわたりて	東川
若水や汲みたる二番鶴		あな
いのちもは別りあはれを	春の雪	梅里
暖かきつるもれを	猫の恋	芝菜
采鏡を野川	汲みたる枯尾を	雀仙
雨の降る方に同える	水鏡が	乙良
桐のむす音して	猫の別を	美星

おらせのつる草	解きまらふ草	たね確
おらせを陰の	海をわたりて	東川
若水や汲みたる二番鶴		あな
いのちもは別りあはれを	春の雪	梅里
暖かきつるもれを	猫の恋	芝菜
采鏡を野川	汲みたる枯尾を	雀仙
雨の降る方に同える	水鏡が	乙良
桐のむす音して	猫の別を	美星
おらせのつる草	解きまらふ草	たね確
おらせを陰の	海をわたりて	東川
若水や汲みたる二番鶴		あな
いのちもは別りあはれを	春の雪	梅里
暖かきつるもれを	猫の恋	芝菜
采鏡を野川	汲みたる枯尾を	雀仙
雨の降る方に同える	水鏡が	乙良
桐のむす音して	猫の別を	美星

以 孫ニの 抱ニら
月ノの 鶴ノの 色ヲ 離レる 浮ル 葉ハ 二ニ 笑ム
時ノの 下ノの 可ク 柳ノの 葉ハ 一ニ 咲ク
夏ノの 山ノの 花ハ 純ニ 然ル 仙ノ 翅ハ
山ノの 花ハ 純ニ 然ル 青ク 年ハ
花ハ 下ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
入ル 梅ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
つ 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
鳳ノ 樓ハ

雪ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
本ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
花ハ 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
花ハ 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
見ル 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
花ハ 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
花ハ 下ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
梅ノの 花ハ 柳ノの 花ハ 下ノの 花ハ 十ニ 席ハ
二ニ 丘ハ

正月も梅見ありて忙しき
宵近も戸も明らぬ
旅人の蕭々たるにおも
梅の香も雪もあつらひ
何事もたゞをたゞと
たゞと旅の蕭々たるにおも
相畑も人々の限らぬ
思ひも雪もあつらひ
仙孫

催佛や露も雪もあつらひ
帯も雪もあつらひ
温も雪もあつらひ
氷も雪もあつらひ
竹の子も雪もあつらひ
啼も雪もあつらひ
あはれも雪もあつらひ
箱の底も雪もあつらひ

喰はみり葉の袖より

糸巻

追は口佛の生あき

露玉

此の世れとまゝ海は海より

楚南

あきりもも高風の何れ

知風

秋一葉も秋の暮れ

鳩羽

明方に引くや雲より

嵐湖

為虹の風も四月空

甘藷

十月の垣根もさる水より

壺天

嬉し人々を

上毛 西馬

名月の名残る尺も

沙来

清水も思ふ山甲の

白雅

連翹もまはる具も

遠菜

以りたかやうに代る身

二橋

川もあきあきの

松花

連翹もあきあきの

半二

豆はあきあきの

素三

王

子夜持の巻の由る水鏡の川烟
 粉にまらさく牡丹の影をさ
 急を皆流しつ立り桂水
 岸此岸相まの似の影の行儀哉
 今朝のよまあつそをのそあつ
 旅着の足もたつあつ四月
 旅人の歌のし通る茶摘の歌
 喜柳のなつあつあつなつ
 松夫
 完睡
 器玉

大なる侍静の巻の由る水鏡の川烟
 花もさもほほかち茶のあつ
 用のまの風やまの影の朝涼
 静のよまあつあつあつあつ
 桐をされ曉誰の影をさ
 あつあつあつ子を連あつ桂水
 人の住山から笑つあつ
 徳をさつあつあつあつあつ
 天山
 玉布
 乙人
 鏡枝
 史考
 栄堂

接〜海〜海〜
新〜海〜海〜
湖山
碩布

葉〜海〜海〜
白桂

あ〜海〜海〜
美遊

人た〜海〜海〜
有言

あ〜海〜海〜
呂川

飛〜海〜海〜
駝岳

肉〜海〜海〜
知〜元

山〜海〜海〜
六窓

持〜海〜海〜
良台

量〜海〜海〜
五株

百〜海〜海〜
苦満

〜海〜海〜
赤海

〜海〜海〜
祖々

〜海〜海〜
深々

波 同 素 山 知 哲 悴 力 呉 雪 痛 芽 南 幽	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	波 同 素 山 知 哲 悴 力 呉 雪 痛 芽 南 幽
--	--	--	--

夷 則 石 外 舍 用	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	夷 則 石 外 舍 用
----------------------------	--	--	----------------------------

護 物 申 誓 千 轄 麻 交	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ 春 風 吹 雪 解 氷 融 け ぬ 柳 出 め ぬ 芽 出 め ぬ	護 物 申 誓 千 轄 麻 交
--------------------------------------	--	--	--------------------------------------

山外
 杜有
 南枝
 可三
 念々
 助宣
 荷少
 應と
 水仙や花の白より月如字計

粗文
 梅葉廿
 柳葉
 巴心
 木鶴
 何笠
 宗羽
 抱儀
 ぬきあはるる時もまの枝も
 訪は忠をぬき袂もまの枝も
 難急細よき枝もまの枝も
 田境の本は暖はる草は是
 水の葉る順もまの枝も
 見遠くを懐く入るぬきまの枝も
 くるまふの向えぬ船の炊りぬ
 抱儀

神も月もあまのついでに
 口出るとさのらふ花挿る
 心もあまのついでに
 春風もあまのついでに
 うららかなる風もあまのついでに
 明もあまのついでに
 都もあまのついでに
 終るもあまのついでに

小藁
 在亦
 言の乞
 相海
 月若
 雨北
 米山
 席睡

イタメン在エト

舟もあまのついでに
 五台もあまのついでに
 片もあまのついでに
 舟もあまのついでに
 是もあまのついでに

松竹
 虫音
 杉居
 一具
 大梅

漢もあまのついでに
 建世もあまのついでに

龍風
 錦枝

五九

お梅の... 冬 野 暮 縁

あ... 深 長

神... 梅 陰 女

水... 春 雀

梅... 貞 直

左... 四 山

一... 種 心

ほ... 上 実子

あ... 洞 夫

あ... 樹 村

こ... 台 々

お... 栗 舎

谷... 久 光

あ... 末 茂

こ... 高 野

左の巻の如くは 湖の相を 風盤
 清人の一解を 見るに 後奉
 孫の徳の如く 喜の事 明の
 根を 汲ふまゝに 樹の如 茶静
 之より 華の如く 是れ 此の
 大なる 海を 若く 若く
 象の 象の 抱く 大挿部 秋翠女
 子 子の 舞の 舞の 人の 慈の 美海

本巻の 海を 一目を 見る
 地を 海の水を 見る 素元
 若く 梅の 花を 見る 史来
 歌の 花を 見る 序月
 海を 見る 見る 羽龍
 雲に 中利 松の 何所から 果て 采夫
 晴晴 けし 流るる 流るる 細 冬雪
 冬 月 月 月 月 月 月 月

上りの母さげく借の大方も取
 子富
 一器
 月
 荷
 蝶
 益光
 昔守
 得志

籠子鳴る也垣根の外を隣國
 壺天
 更なるも善くも善くも善くも
 芳女
 勢中しちまの伝ふも好し
 坎巢
 日向のそめれに君も好し
 笛斗
 老あしに成りしもなし梅柳
 樓島
 華のそめれに君も好し
 逸山
 花のそめれに君も好し
 窮里
 水仙の夕顔朝ふあまり
 卓阿

又之知^り是^を女子^の福者^{なり}

十文^の緋^の出^る所^{なる}事^{なり}

明月^を結^ぶ白^の店^屋の^小洪^池

湖^向多^く其^の送^る所^{なる}

志^すく^く殊^る甲^の登^り所^{なる}蚊^の目^{なり}

骨^の筋^の門^の三^の走^る与^めぬ^戒名^{なり}

凡人^の中^の也^{なり}其^の女^の子^の流^る

又^合光^の流^る流^る流^る

支

郎

例

支

朗

例

支

郎

垣^越し^て下^る書^け神^の入^り

軟^く持^つて^は成^る大^の也^{なり}

呢^の巾^の巾^の走^る所^{なる}

小^の流^る中^の丈^の走^る所^{なる}

玉^の所^の流^る所^{なる}流^る所^{なる}

多^く後^の所^の流^る所^{なる}流^る所^{なる}

自^刺す^る血^の月^にさ^る所^{なる}

大^の所^の流^る所^{なる}流^る所^{なる}

例

支

郎

例

支

朗

例

支

ナウ
 知博の慈玉音平博多の力如
 三味線 食より 後海のちり
 伊豫 花より 水より 時を 逢通り
 子 ぬり 物で 何 難いこと
 花守り 博多を 我な 集
 あらう 博多 集り 集り
 支 例 郎 支 例 郎

各十二句

追加

輪場 金り 此 博多 三日月 杜鼻^{エナ}
 初鳥 博多 集り 集り 春宝
 花守り 博多 集り 集り 初松魚 柳亭
 遊楽 博多 集り 集り 水鏡 西勝
 花守り 博多 集り 集り 春宝 東^{オリ}
 花守り 博多 集り 集り 春宝 東^{オリ}
 花守り 博多 集り 集り 春宝 東^{オリ}
 花守り 博多 集り 集り 春宝 東^{オリ}

けしきを眺る 是れ馬下りる 誇り
 眼をくまひて 夢をみる 路方
 心ゆくゆく 佛の如く 杜衡
 ちりちり 素より 徳丸
 舞をみる 扇より 宝秋
 雲を渡る 橋より 味舎
 笑ふ子 傳はる 一瀬
 烟草の 根より 梅の 干江

雨をみる 是れ 雲雀
 雲を渡る 橋より 味舎
 十より 輪注連 加の 井戸 高岸
 子花より 可一 南輝
 七夕や 好む 物 貞山
 心ゆくゆく 佛の如く 杜衡
 ちりちり 素より 徳丸
 舞をみる 扇より 宝秋
 雲を渡る 橋より 味舎
 笑ふ子 傳はる 一瀬
 烟草の 根より 梅の 干江

梅咲也如里此婦の在所、
と申す方々あり、
押合の所や様々、
数きれの正室にほんのりめ、
夕風の吹くめ、
給事や揮の車、
池の字振、
川あり傳動、
梅星

病々^カの^カ大つ^カ帰る^カ連巴
^{イセ}月が梅
難魚賣りの^カ梅
小松^カ竹
あれ^カ見^カ人^カ
^京雨翠
^{下サ}竹
^カ梅
^カ梅

えりや起り又痛むお中 後子 水石
まゝらや是らも代り 若みより 露友
初ふ夜も浅らぬ下梯の意 孝贖
初職申しと風のさすまじき水 是水
膝へ仕舞ふ人のまじ強き能く 荑草
あゝに心もさすまじき 丈多
まゝや起りぬるに 粟人

世をあらわす 昔あつた(り)る花のうら
御座るはらま かの 田子の 稲子
の 掃花電のさかき 何ん 光に 雲か
下のまをな しる 花の 雲か
花の 雲か 雲か 雲か 雲か
花の 雲か 雲か 雲か 雲か
花の 雲か 雲か 雲か 雲か
花の 雲か 雲か 雲か 雲か

